

府立学校の在り方懇会（高校教育部会）への意見

（注）この意見集は、府民からお寄せいただいたご意見を項目別に整理編集したものです。
なお、ご意見が長文の場合は要旨のみ掲載しています。

< 学校の特色について >

- ・ 制服や人の話だけで決めて、学校の内容では決めていない傾向がある。各学校の特色が子供にも親にもわかりやすく、内容で決められるように、特色の確立とアピールが不可欠。
- ・ 普通科の類・類型や学科群の新たな設置により特色ある名称が付けられているが、中学生や保護者にわかりやすくしてほしい。
- ・ 生徒の多様なニーズに対応するためには、高校が特色を明示する必要がある。
- ・ 学校内格差の激しい学校ではいろいろな課題を抱えているようだ。生徒の多様な興味・関心に対応した進路選択があっても、そのニーズに対応できる教育課程も盛り込めない。それを解消するために各高校が特化を図り、各高校自体を個性化すべきだ。
- ・ 「特色ある多様な高校」を用意することは、決して子どもの幸せにはつながらない。本当に子どもに必要な学びの場を保障するために最も大切なことを考えるべき。特色づくりが今日の子どもと教育をめぐる困難を解決する処方箋とは決して言えるものではない。かえって競争と管理の教育を助長し、その中で苦しむ多くの子ども達を一層袋小路に追い込むことになる。
- ・ 魅力ある府立高校を作してほしい。「教育の機会均等」は入学するまでで、「結果の平等」は行き過ぎ。「不登校生徒」や「学習意欲の乏しい生徒」を受け入れるのが公立の使命だとしても、大きな学力差のある生徒、個性が異なる、多様な生徒を1つの高校に受け入れ、同じ教育を提供するのは無理。
- ・ 異なるサイクルで動いている生徒がたまたま同じバスに乗り合わせた状態では意識の結集ができない。先生の指導も中途半端なものにならざるを得ない。
- ・ 特色ある学校で、もっと生徒の個性を伸ばすことが、よりよい、幅広い人づくりになる。

< 通学圏、適正規模・適正配置について >

- ・ 生徒数の減少・交通機関の変化から旧来の通学圏や類型だけに固執する必要はなくなっている。
- ・ 通学できる範囲に特色ある学校や学科が配置され、選択の機会が与えられるよう学科の多様化等を進めていただきたい。
- ・ 地元の活性化のためにも地元高校の存続は必要だが、行きたい特色ある学校が地元にないため他地域に流れて地元高校が定員割れを起こしている。専門学科や普通科（類）等を各通学圏にバランスよく統合・配置ができないものか。
- ・ 高校の統廃合は絶対にやめるべき。最低、現在の高校数は維持すべき。30人学級実現など、学級の人数を1人でも減らすこと。そのためには現在の府立高校の設置数を維持すべき。「適正規模」論は「適正規模がないと適正な教育が成立しない」という「錯覚」を前提に、必然的に少子化＝「学校を減らす」ことを合理化するもの。また、「1学級は40人」という前提に固執した議論も不思議だ。子どもの数が減る今だからこそ、可能なところから学級人数を減らす絶好のチャンスだ。

- ・ 生徒減少を見通すと学校の小規模化は避けられない。望ましい規模はあるだろうが、府下全校を一つの尺度で見るとは適当ではない。再編統合を「量的側面」「効率」だけで考えるのではなく、その学校の果たしてきた役割、今後期待される役割、地域の事情も勘案することが大切。学校選択の幅を広げるため、一部の学科等に特例を設けて通学区域を拡大することは現行の通学圏制度を形骸化していくもの。
- ・ 京都市は4通学圏に分かれているが、行きたい高校に自由に行けるよう、1つの通学圏に。

< 入学者選抜について >

- ・ 生徒が希望する学校を受験できるようにすることが生徒のニーズに対応することになる。せっかく高校が特色を出しても行きたい学校に行けないようでは特色が生きない。
- ・ 生徒個々に進路希望高校があるはず。それぞれの進路希望実現のためには現行選抜制度には大きな壁があり実現できない場合が出てきている。特色ある学校を希望している生徒にこそ希望がかなう、生徒の能力を引き出すことを中心に据えた選抜方法に改善すべき。具体的には「学校選択の拡充」「複数の受検機会」「通学圏の見直し」
- ・ 時代の要請、府民の多様なニーズに基づき、生徒の学校選択やコース選択の幅を拡大するべき。
- ・ 「通学区域に応じた学校選択」から「個々の生徒の目的に応じた学校選択」が求められている。学校選択の拡充と現在の通学圏の見直しが必要。
- ・ 総合選抜は、多くの志願者を受け入れる上では成果を挙げたが、高校入学前後の学習意欲を形成する上では必ずしもよい働きをしてきたとは言えない。現在の総合選抜+各種推薦入試制度は複雑さの限界。いくら丁寧な選抜制度をしても入学時に意欲を結集しきれていない。中学浪人を出さない工夫と輪切り選別の弱点を顕在化しない工夫ができれば単独選抜に踏み切るべき時期だ。今、普通科を単独選抜に踏み切らないと多くの矛盾を抱えたままになる。定員まで単独選抜で合格させ定員割れした分を通学圏内で第2希望をとるようにすれば、いくつかの課題が解決する。
- ・ 「地理的条件による入学校の決定」「最寄りの停留所・駅に基づいて入学校を決定」することに納得できない。自分の目指す高校を受験できるようになれば高校に入ってもっと勉強や生活に素直な気持ちを持ち続けることができる。
- ・ 総合選抜は、入りたい高校があっても受験できない制度になっているようだが、本当に子供のための教育制度ではないように思う。子供のことを思うなら、行きたい学校を受験し合格すればより一層頑張ることになり子供の成長に役立つ。今のようになどこの学校に入るのかわからなければ親も子も不安だ。
- ・ 新制度のもとで、進路実績・スポーツでの活躍等成果を挙げている。しかし、近年は高校生が多様化し、生徒間の差が顕著に現れている。一つの高校で全ての中学生のニーズに応えようとしているから、無理が生じている。全てを一つの高校で担おうとすれば、どこの高校も似通ったものになり特色は出せない。ある程度の絞った、進路・スポーツ等、重点・目標とする内容が異なる、授業のペースがいろいろな、生徒それぞれの希望に対応した高校、ある程度同じ目標をもった生徒を対象とした高校を作るべき。今の地域性・総合選抜はとりやめ、各高校が特色を前面に出しやすい、中学生が進路選択をしやすい単独選抜にすべき。
- ・ 普通科 類の現状を見ると、総合選抜制度の見直しが必要。単独選抜制度に変更し、自分たちの学校は自分たちで守らねば、という危機意識を全教職員が持ち、学校間競争により資質向上・教育内容の充実で生徒・保護者の期待に応える学校作りができ、他地域流出を防げる。

- ・ 総合選抜は果たしてきた意義も大きいですが、今日的には課題もある。生徒減少が進み、各高校の特色が一層求められる中、総合選抜制度について検討を求む。
- ・ 出願者の希望をかなえるため実際とは異なる「停留所・駅」を願書に記入する例がある。記入に際する留意事項を詳細、明確に記述する必要あり。
- ・ 普通科の総合選抜制度のバス停方式と特活・部活の20%は実にわかりにくい。バス停によっては年により入学校が異なる。20%で入学したのかどうかもベールに包まれたまま。普通科はいつそのこと、単独選抜にするほうがわかりやすい。希望にあった高校で意欲をもって学べる。京都府全域を単独選抜にすると激変ということになり難しいのであれば、交通機関から考えせめて京都市以南、口丹以南は単独選抜に。出願の際、他県のような「出し直し」可能な制度も検討。
- ・ 現行の選抜制度の中で 類特活・部活の30%は選抜基準が不明確だ。周囲の人たちは皆、成績順で選ばれると思っている。特にバーターという措置は不透明・不明確・不公平で親は不安だ。テストの成績が1点差で落とされることは親としても納得し、あきらめられる。訳のわからない理由で(成績が上なのに)入学校が決定されることには承服できない。
- ・ 「特活・部活による希望校入学」は主旨が明記されているにも拘わらず、「希望高校に入学を許可されるための一つの手段」と軽く考え、入学後活動の意志の弱い出願者もいる。この選抜方法には出願者の強い意志を確認する方策が必要。
- ・ 類は理数と人文を分けずに募集したほうがよい。現在の生徒は中学校の指導をもってしても高校が望む選択レベルに達することは困難。類に進むべき生徒が、私立に、そして、わずかだが類にも、流れている。私学には授業料減免・留學制度がある。類に流れるのは、指定校枠狙いだ。「嵯峨野こすもす」「英語系」「桂専門学科」「工業高校」「商業高校」が健闘している要因は推薦入学の枠があること。類にも特徴が必要で、類に推薦枠を設けるだけで、生徒の希望状況は変わらぬと思う。
- ・ 推薦入試や、一部の専門学科に限られている中学校からの内申書だけの選抜は、本当に実力のある生徒ではなく、安全志向の生徒が集まっている。もっと大胆に、各通学圏の上位層が集まる学校や類において、かなり高い水準の成績の生徒について無試験入学の道を開くべきだ。
- ・ 少子化が進み、ほとんどが高校に進学している今、入学試験の意味も薄れている。人間形成にとって重要な時期であることを踏まえ、高校入学に際しては面接や作文を取り入れたほうがよい。
- ・ 中学校での学習成果を積極的に選抜等に生かす方向で考えてほしい。「総合的な学習の時間」での取組状況を自己申告させるなども一方法。
- ・ ほとんどの中学生が高校に入学している現在、学力試験で1点差を競うことにどれほどの意味があるのか。むしろ、生徒のやる気が大事で、学ぶ意欲や興味・関心をもっと重視すべき。作文や面接を取り入れるなど従来と違った入学試験があってもよい。
- ・ 面接は選抜方法として不適當。1点差で落ちることは納得できるし受験生の人格も傷つかないが、面接で落ちると「人物評価」で落とされ傷つく。短時間で人は見抜けない。教育委員会が可能だという考えだとしたら「指導力不足教員」のことをどう説明するか?面接は、大人ではない中学生には不適當。
- ・ 「多様」で「多元的」な入学者選抜は、決して子ども達のためにはならない。「選抜」である以上、全員が「希望通り」の高校を選べるわけではない。「選抜」が点数の上下による競争を前提としている以上、点数の高い受験生は「希望する高校を選べる」が、そうでない受験生は「希望通り選べない」ことになる。単独選抜になれば、こうした競争が一層激しくなり、多数の子ども

も達が振り落とされていくことは明らか。総合選抜が万能の制度ではないが、こうした単独選抜の弊害を少しでも和らげるものであることは明白。また、「入試の多様化・多元化」ということが高校入試を一層複雑でわかりにくくしており、入試の競争化を一層激化させている。

- ・ ある特定の個性や能力に対応する方法として考えられる奇抜な方法や一面しか把握できない方法は避けるべきだ。
- ・ 昨年、受験システムをしっかりと理解しないまま受験した。学校の先生から表面的な説明しかしてもらえなかった。納得できない点が多々あった。
- ・ 内申点のつけ方にも疑問を感じる。美術・音楽・技術家庭・保体は成績×3となるのか？実技4教科は学科試験がないから日々の努力・点数で考えるということか？わからなくもないが、得意・不得意があって、いくら努力しても実技の場合は成績に限度がある。
- ・ 実質的に義務教育化している現在の公立高校には、中学校で不登校だった生徒にも適切な教育を保障すべきという社会の要請に応える観点から、不登校生徒の受け入れ枠を設ける必要がある。
- ・ 府立高校としても、通学圏に1校でも、何%か不登校生徒が入学できるシステムを整備し、それに対応できる体制を整えた全日制高校を。
- ・ 様々なハンディのある生徒の（合格させる）選抜は、アメリカで行っている「アフーマティブ・アクション」のような考え方の導入が必要。建前上の選抜の公平性に固執してはゆがみが拡大するばかり。

< 普通科、類・類型制度、学校の特徴について >

- ・ 高校受験の段階で、高校3年間で固定されるのはいかなものか。入学した後も、本人のやる気をそがないよう、類から類への移動あるいはその逆も可能となるようにしてほしい。
- ・ 現在の類・類型制度は以前の小学区制から制度改善を進めるに当たって学校格差を作らない配慮で行われていると考えるが、異なる数個の学校が同居しているだけという実態もあり、それぞれの良さが生かしきれていない。
- ・ 課程・学科、学科群、類・類型、系統と細かく分かれているが、将来の目標のある人にはいいことだが、迷っている人にとっては負担になることもある。
- ・ 改めて多くの中学生が希望する普通科のあり方を見直す必要がある。普通科を職業教育の学習なども含めた幅広い総合的な学科に位置づけ、大幅に科目選択や特色を保障することが必要。懇話会が今だに類・類型制度を土台とした議論を進めていることは疑問。多くの中学生は、高校入試の時点で将来の進路選択を余儀なくされる現行の類・類型制度に苦しんでいる。懇話会は類・類型制度の弊害を改善する措置を今すぐ提言すべき。類・類型制度は基本的になくしていくべき。
- ・ 一部地域で類の単独選抜も導入されたのを機会に類については人文系・理数系各専門高校を設置して重点的に能力の開発を進めるべき。職業学科が主流の高校まで類・類を併設するような在り方は改善すべき。ア・ラ・カルト方式は、総花的で特色も中途半端。

< 総合学科・専門学科・単位制について >

- ・ 生徒の多様なニーズに応えるためには、総合学科の増設や専門学科の一層の充実が望まれる。福祉関係に興味を示す生徒や部活動に魅力を感じる生徒のためにも各高校の特色を出してほしい。

- ・ 中学校卒業段階で進路目標を定められたらよいが、大人でも将来を見通せない現状で社会体験の少ない子供では、高校3年でも進路を決められない生徒が増えている。進路意識作りを生徒個人の問題とせず、学校体制として提供できるのが総合学科だ。「産業社会と人間」や「体験学習」を通して自分の生き方を考え、進路意識を形成できる。潜在的に、進路一辺倒ではなく、様々な能力を伸ばしたいという生徒は多く、そういったニーズに応えられるかが鍵だ。京都ならではの様々な科目や幅広い選択科目を設置、社会人専門家の指導などの工夫をしたら、生徒に希望を持たせることができる。多様なニーズに応えるためには、生徒が減少し使用教室が半数程度になる学校が適当。
- ・ 今の生徒は様々な面で体験が不足しており、進路も主体的に決定する意欲や能力が低い。そういう意味で総合学科への進学が中学校での進路選択の先送りにならないようにすることが大切。
- ・ 総合学科は単位制なので多くの科目設定が可能で、それぞれ興味・関心のある科目選択ができ、生徒の多様なニーズに対応できる。生徒の一人一人の能力を伸ばし、進路実現に繋がる。受験勉強ではなく、生徒の個性や能力を伸ばせる総合学科の増設を希望する。
- ・ 今以上に生徒の個性化・多様化が進行するという事態も踏まえ、基本的に全府立高校に単位制を導入すべきだ。求められている資質や能力は具体的な教育活動システムがなければ働かない。

< 中高一貫教育について >

- ・ 生徒の発育段階に応じて体系的・効率的に一貫した授業ができるという点ではよいが、学校週5日制により学力の低下が懸念される中、目標を定め努力し、それまでの努力の成果を判定する物差しとして位置づけられる入学試験はなくなるというほうがよい。
- ・ 多くの中学生にとっては、高校受験のハードルをはずしてしまうと、むしろ歯止めなく緩んでしまう。中学校で高校の学習内容を事実上取り込めることにメリットがあり、公立で設置となると問題点が多すぎる。設置せざるを得ないならば、他に及ぼす影響が少ない場所にすべきだ。
- ・ 現在の教育をめぐる状況の中では、この制度に期待をかけたが、免許、人事異動、学校運営、施設設備等あまりにも困難な課題が多すぎてよい見通しが持てない。
- ・ 「大学受験のみを意識した学校」か「特色ある6年制」のどちらかに偏りそう。多くの生徒が中高一貫教育を受けることができない状況では中途半端な改革の感がある。6・3・3制をどう区切るのが望ましいかも検証しながら検討すべき。
- ・ 生徒の個性化・多様化、社会の変化に対応するため、中高一貫校を早期に発足させ、学力伸長等で特色ある学校作りを目指してほしい。
- ・ 新世紀の教育を展望した柔軟な教育システムとして是非実現に向けて踏み出すべき。専属のスタッフが5年程かけてカリキュラム作り等実験的に実施し、京都府のモデルケースを示すべき。
- ・ 選択的な中高一貫教育の導入は、エリート育成教育の発想。

< 定時制・通信制について >

- ・ 単独選抜にするといわゆる「底辺校」ができるという批判については、単位制・通信制、総合制など個性を尊重して誇りを持って入学できる道を用意すべき。また、生徒の意識が多様化している中では時間的な拘束が緩やかな高校も必要だ。午前・午後・夜間の3部のスクーリングやIT技術を利用した通信教育を組み合わせる新しいスタイルの通信制単位制高校を作ることを考えるべき。

- ・ 他府県の昼間定時制・単位制高校は、「高校は行きたい・卒業したい、一日の教室授業には耐えられない、仕事もしたい、夜に学校に行くのはいやだ」などの生徒たちのニーズを掴んでいる。
- ・ 不登校生徒を受け入れるために、通信制・単位制高校等を充実させ、高校卒業の資格が取得しきれるシステム作りが必要。
- ・ 昨今の実態を見ると、働きながら学ぶというより全日制のように拘束時間の多くない、自分の生活スタイルに合った学校に行くという意味合いが強いようだ。このような時代のニーズに応える昼間定時制のような形式の定時制も必要である。
- ・ 働かねばならないから夜に学ぶという生徒は少なく、「全日制に入学できなかった」「全日制の6時間では続かず、定時制・通信制に転入する」生徒が多いと聞く。時間割を自分で決められる、昼間の定時制を京都市内か、山城地域か、乙訓地域に是非とも設置すべき。通信制への希望者が多い朱雀高校には3課程が併置されているが、全日制を切り離し、定時制・通信制の単独校とするか、新たに設置するか、また府南部に新たな通信制単独校を設置する必要がある。
- ・ 不登校の生徒に対応する教育機関として、多部制の昼間定時制が各地に設置されているが、ここで考えねばならないのは、なぜ不登校が増えているかという問題。残念ながら今日論じられているのは、不登校を解決する議論ではなく、不登校を受け入れる学校をいかに作るかという議論。一方で不登校を大量に生みだしておいて、一方でその子ども達を受け入れる学校を作る議論をするのは本末転倒。
- ・ 近年の高校入試で、定時制への志願者が急増し、多くの子ども達が不合格となっている原因は次のような点。
 - 全日制的の募集定員を機械的に減らした結果、不合格者が増加。そうした子ども達が定時制や通信制に志願している。
 - 長引く不況などの影響で、公立高校の志願者が増加。
 - 山城・洛北・堀川の3定時制の募集停止。
- ・ 従来、夜間定時制は「働きながら学ぶ学校」として位置づけられてきた。それだけでなく、夜間定時制の持つ新たな役割が見直されている。全日制的の教育のあり方を再点検するとともに、夜間定時制の持つ新たな意味を考えるべき。

< 教育の内容について >

- ・ 授業やクラブ活動等では生徒の自己形成ややる気を醸成するような内容を重視する必要がある。
- ・ 「生徒が自身で学ぶ学習 = 大学でのゼミナール・演習方式」「考業 = 思考・追求が中心となる学習」「勤労体験学習」「総合的な学習を発展させて農業・工業・水産等の高校との交流学习」の重視、「道徳教育・国語教育の充実・深化」を望む。
- ・ 全ての高校生にノートパソコンを入学と同時に貸与し、教員は授業に集中、必要な補習や自主学習は家庭で学校と接続したパソコンを利用。広く社会人にも公開することが可能。
- ・ 「中間まとめ」の2(1)「教育内容の在り方」では高校のみに限定して考えられているように思われる。中高の接続の視点が重要。系統性・順序性を考慮して高校の教育内容を構成し、個々の教員がプロとして自己の教科を習熟することから始まる。
- ・ 学校週5日制や新教育課程の実施に伴い、自由な教育課程編成による特色ある学校作りと関わり、今まで以上に公私の格差が広がるのではないかと危惧する意見がある。そんな中、公立高校の裁量権の一層の拡大が必要。

- ・ 普通科 類の入学生徒の多様化が進んでいる。習熟度別学級編成も考えられるが、生徒の能力・興味・関心等に応じた学習活動ができるよう教育課程の基準を緩和してはどうか。例えば、クラブ活動が卒業認定の単位に加えられるなど。
- ・ 学習カウンセリングのシステムを導入。
- ・ 空き教室の活用、退職教員などのボランティアで生徒の自学自習を促すような支援も一考。

< その他全般について >

- ・ 協議の内容に全面的に賛成。協議の内容どおり積極的に推進し、21世紀の府立学校の基盤の確立を。
- ・ 京都府教育委員会の改革を支持。子を持つ親として、懇話会の提言に沿って改革を進めていただきたい。現在の経済状態の中で公立高校に対する期待は大変大きい。親の願いは安心して通わせられる学校、進路実現への期待が持てる学校。何のためにどこをどう変えるのかを明確にした改革、一本筋の通った改革を。あれこれ配慮する結果、目的が曖昧で中途半端な改革にならないように。
- ・ 概ね「中間まとめ」に賛成。明確な特色のある中でこそ生徒の個性は開花するもの。単一ではなく多様な価値の中で揉まれてこそ自分の生き方を見つめられる。
- ・ 子供たちに多様な選択肢を提供できる高校教育を、将来の夢に向かって挑戦できる環境を充実し一人一人の個性と適性を発揮できる高校づくりを目指してほしい。
- ・ 各公立高校は特色ある教育課程や取組を積極的に情報公開し、生徒や保護者がその情報をもとにしっかり学校を選択して進学することが大切。
- ・ 「総合選抜制度」が本当に子供のためになっているか疑問だ。総合選抜制度の見直し、学校の特色づくりの明確化は、是非とも子供のことを考えて議論してほしい。
- ・ 京都府のこれまでの制度の中には他府県に誇れるものや苦勞の末生み出されたものもあるだろうが、他の通学圏の特色ある高校に進学を希望する声等、高校制度の見直し・改善を求める意見が多くなっており、見直しの中で意義を再確認することも重要。十分な議論の上で、思い切った改革を実行し、21世紀にふさわしい制度の構築を切望する。
- ・ これからの教育にとって大切なのは社会の変化に主体的に対応した課題解決力・生活設計力・自己学習力・自己指導能力の開発。それらを幼・小・中・高・大と組織的・継続的に育成すべき。
- ・ 学校は地域社会の灯台。まず教師が自分たちの学校という意識を持つ必要がある。現実には2～3年何とか過ごせば転勤ということで教育活動がおざなりになってしまう。特に管理職は定年までその学校で頑張るつもりでないといふ学校は生まれにくい。
- ・ これまでの学校のカラーをうち破り、特色ある学校作りを推進するためには教職員の情熱と資質の向上が不可欠。頑張っている教職員を認めていく制度の検討も必要。
- ・ 今の高校制度は生徒の興味・関心に柔軟に対応していないと思う。特色ある学校間でリンクし単位を認め合うことにより、「生徒の意欲が高まる」「先生も意欲の高い生徒を教えることになる」「施設面でも大きな改修の必要がない」等のメリットがある。どういう高校とリンクしているかが高校の特色づくりに役立つ。